

燈業

二序

院定藏

山陰國南陽郡

信濃をく姨とて山ハ天造地設子一一乙
 加ろ代ろ少固風のうぢろ一もし子屋ろらな
 衆し乃選案にきく云急る在し光を
 加を田毎の丸穂粒し空亦何を種てハ
 連哥とほくた俗語の旨をとあろ
 裡ろあしつきの燦ろやろこ子けろけ備をまぬ

放肆を去りて巖より宛尔望して一白を
看む面影肅然として精神此地の至と
ちりて埽正とあり泣くら敷し其言はふ乃
雅馴りハ今も松月の友の臨を階ちる様と
あけり謀り海内子と名風の如くワレと
雲乃ふとく停る嗚呼徳の古のあまかり夜子
我師多辭居士所ハ木と世余りの皆そこ
跋渉し一陌居り流暑し日門通志と遊り

折らば彼嶺石の僧子碑を樹をむるを
輿中と心しと時を厚くして言はら子止め
社有も又年多り月めらつて雲と隔りて
沿つて所言ゆく絶るるを歎る森林是を
白尾坊之と世確岸の巖阻を越りて等燭
してあつた一石を尋るる子孫を友の
矢代子路因あり戸倉子繁所ありけこ子を
礎也し如くは日門を教る子教るを

荷つゝの徒取子持もて世に子以て身あり
去る子懐降社吟を此時戸をたてて
終に二子助勢にて諸子帥一をくわす子
くまひりて終子碑を以てて建め讓子
其功成る子絶り自らたててこの宗事に
人しあつちり風水を一筆あり且師先師
の居士位中乃造作古人哲匠の言を子
巻中を簡に以てて曰く諸國在世の

風子の句を置ぬは是れ子并諸を
流るよと又もて乞ふる子志ありは子
其筆跡を思ふ子志も歸致子——て
風流竹馬——此と糸子りあらんよ、以て
りも帯る、賤——く、十筆不枯の碑と
るも子立るありあつて西影を糸と帯て
と乃おちりて山子照る月の影らり
了り終るありと東都に在る子の



左 正 右 後

碑面

おもかげや 日の子
姨ひより伝

芭蕉翁面影家

東邦松島庵多摩門人
信一州連合資樹立

明治六年秋八月日



かくい 題する子

あんちりぬ

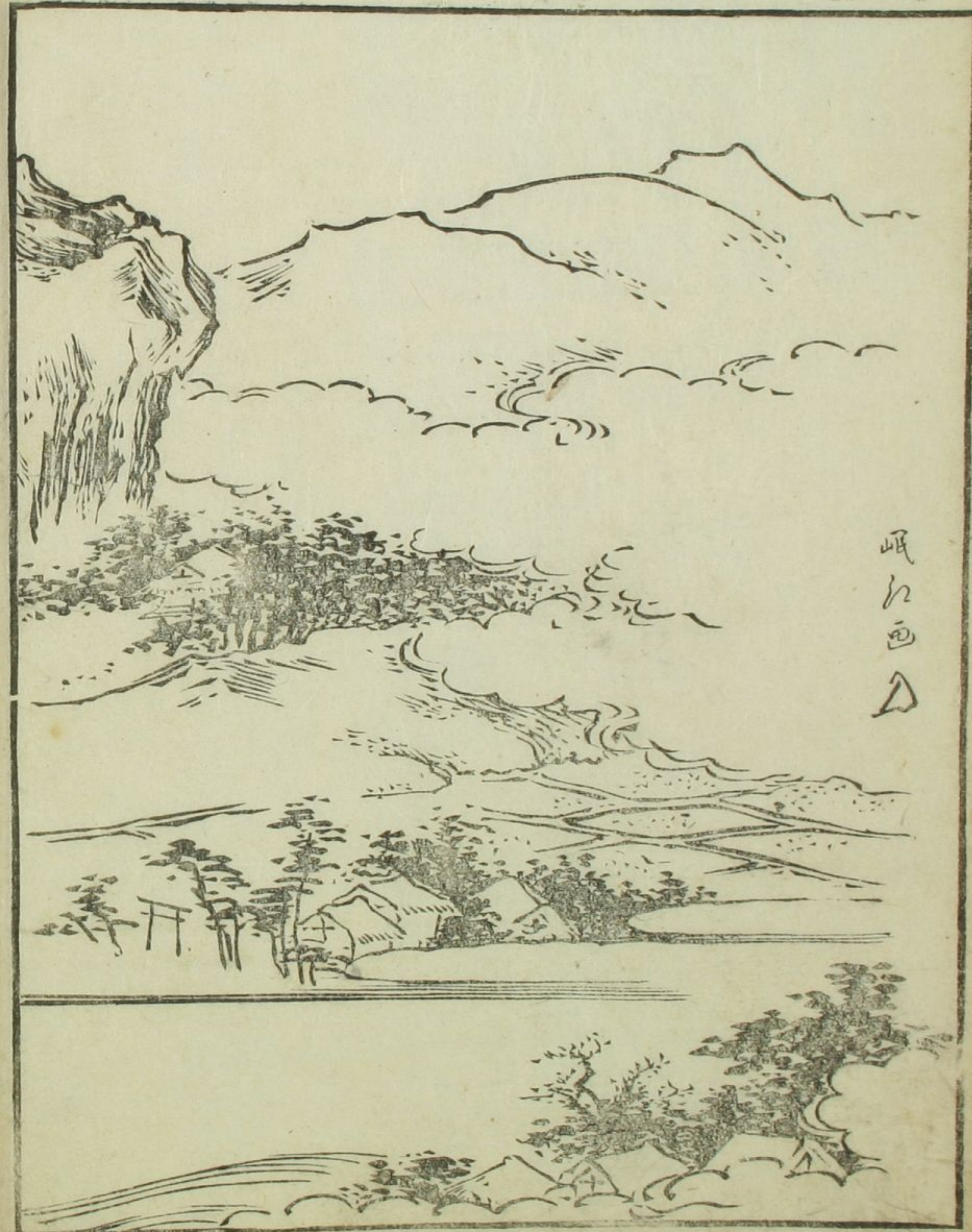


=

信濃國
更級郡
英捨山
芭蕉翁
面影冢之圖



岷江画△



姨捨之辨

ふと一姨捨の月見んかきさるるまは
八月十一日美濃の國をぬらさ遠く
日あきさるるを木よらま仲浦うき
ねりよさるるを夜や一船の里より山を
ハワリよ里より一と冷しきまあ
かきさるるを見んかきさるるを
山の海よりたきさるるを
あきさるるを
くを捨るるを

おもひけお姨捨いなりけり日の友

芭蕉翁

萩のとり 岨のあを

鳥欄

あきさるるを

昭彦

あきさるるを

路芳

持出てとよめさるるを

指山

シ

路一

余の妻をいさるるを

箕山

夢をいさるるを

五家

酒をいさるるを

字夢

蕨の何となくをんりりり
 茅草の塔中をく十はりり
 巨福踏坂子莫日うんれ白
 亦復のたふつうがくも躍り
 然る何り機を肩より何り
 あくまの花を見よあふりり
 照ハるのくはくもつり
 花はあききのあふりり
 千本急佛をさりりり

略因
 星向
 烏奴
 吉丈
 蕨山
 左葉
 素冊
 紫向
 烏布

六

車合子被ぬくはくくハのく
 此のたききりくもひきり
 ちくくく時向の線の葉をく
 隣の留まるのをやと月輝
 何いて一に麻疹の神は極きり
 草野をぬくくはくはく
 家中をぬく女捕りしはく
 句ももたきくはくはく
 巻詰の持と塊積よれくはく

略草
 指山
 土象
 昭信
 鳥深
 字勢
 素冊
 箕山
 略一

君とを好むの惟乞、母
 啓日よすき、艶にお普、品
 一とく啓、冷、儘、あ
 きらんとし、向ひ、園、中、嫁、兼
 桑一と連、ハ先、一、来、る、者
 残、あ、と、徳、の、一、た、ふ、小、出、る、き
 西日、斜、に、ぬ、こ、さ、さ、さ、り
 碑、の、あ、ま、さ、む、ぬ、ま、の、近、く、は
 ま、ま、と、端、川、藉、山、径、久、し
 執、印

御多事、姨、妹、の、と、布、て、あ、り、ぬ、川、流、る
 山、あ、ま、の、ま、い、ち、ぬ、の、仁、知、と、樂、む
 の、ま、ま、の、ぬ、く、の、信、ぢ、り、僕、う、た、ま、い、ハ
 只、其、取、寄、を、巻、一、志、く、拙、き、心、を
 や、ら、ん、て、今、流、り、原、く、嫁、と、な、れ、あ、り、ハ
 白、尾、原、の、系、信、中、に、踵、決、一、と、白、友、を、
 う、ら、ひ、ぬ、君、士、の、志、を、遂、す
 蕉、庵、の、遺、詞、を、石、に、と、り、け、り、姨、石、の
 傍、に、立、て、ふ、見、の、記、念、と、せ、ら、る、れ、た、か、さ、

少くもあはれしうあはれしう
 碑を玉免子磨てあはれしう往昔を
 いふと輝き天極で陰をいふ
 知もさうあ後世を々世に
 十竹窗

月夜お思ひあはれいやはき
 おもさういふあはれあはれあはれ
 堆しあはれあはれあはれあはれ
 冢子あはれあはれあはれあはれ

十竹窗
 菜
 指
 掃
 一

碑のあはれあはれあはれあはれ
 いふあはれあはれあはれあはれ
 いふあはれあはれあはれあはれ

草視亭
 浪川
 荻山

禱子あはれあはれあはれあはれ
 自然あはれあはれあはれあはれ
 園位法所宗祇法所あはれあはれ
 芒鞋を破りてあはれあはれあはれ

人の口は勝多きをれ 祖考の歎言を
 石に字して姨ひより伝やうに樹をま
 木をまきまきく白尾居る居士の之を嗣
 杖を継ぐしを旧友を勸しふより水を
 徳に命終の祿さし碑とともま、とく
 染し 鏡も女の玉宇を御きてハミ世を
 去のひ碑もむひてハミ載の後をたより
 心成親

路因

面影冢六葉

信濃がれ佐友を海をふりうま何かせは
 け秋ハ月を祿ふ飾る 芭蕉翁の碑を建ふ
 翁の月見あるふしを真まむし一の跡とよハ月
 予の舟なるをぬれしとくさつと侍る栗津
 義仲寺がふ翁のをきはきとう海のとを何し
 堂はろ紙まとのし襟まけ遠きをいとま
 としあゝのあとを摸しゆねもけとよハ一壺子

こ先いすね在うおしくたつぬぬのりく公はやくし
たひひ碑のいさきうたつぬはつき車に載せ人く
ちうを報ひしか又聲を伝ふるのり志きりまきりの
さきうをやまううまきばぬ榮西祥術のむうを
ふくぬる人ありうお嗟吁存の徳化のかさ
とこぬきし一志を城申す為一碑成すを
まうせく一慇懃よおのもも両手をりてめまひ
たうひぬ石友のつりかさけあつらの水いぬと俱
のうふもたつぬ 在うおしくたつぬことと後の人を

後の人よ信よがたつぬ とも面影家ハ瑛石のさう
うしおのたう松か一とよき記よすううこハ林能たふ
ハ幡の星やこの神のまもらひまよのつりぬハ廣又の斧を
へるぬくもたう又自のまよたつぬぬとたふ自の
有ぬぬの山獄ひと山鏡臺ゆふくハまき碑
まよ飛登川ハ急の飛赤くゆま石まきしハ標舟の
徳の一節よゆきふくを安し一又級川ハと廣く港の
まよぬえ見してぬぬハまきハ向の園伽嗽くま
ふようぬ字神堂の証のまよハ救世大士のはとぬ

水月道場とてよはりぬ川は乳を入て報たまひ〜
 阿まうも地なりりおもけお姨とる辰月の友かさく
 天心ももひ私を入まふとて病よ〜ひをまをぬ〜ひ
 きま〜もむるをぢり外とてあもあは新よ此まよのこま
 ちと友ともの別あぬまをたひひやぬも〜道〜ゆかき
 ぢふ面影あのおよか〜こまを今難の運をまいの夢
 をあ〜志り〜病とてあまあり〜ま牛跡とて秋と照阿りせ
 多たハ呼後たれまてら免〜ひ〜り外
 碑たれ〜お月を〜ぬ〜お〜ぬ〜り
 白尾坊
 昭 唇

良お山上吟

姨 控お月を〜りの掛〜み

ねが〜

登り山のをの〜お月よあ〜ての句
 又家およおもろけをま〜ひ〜章めま
 堂よお〜一〜ひ〜り外

各詠 不分題

以さちおお 燈と〜ぬを傳〜り
 帳け〜ぬハ〜ぬ暮〜る 燈 籠

夫代 路 岡
 菟 山

若かりお虫を舞あそぶおのち
 鶉のあし道あふ根芥り那
 何し〜鼻の跡見る月あふ那
 ちる影よ〜作向をえんあふ
 隙〜おさるの脚を踏け〜あ
 六き文を忘角後さもみちあ
 康のちあぬ〜むき〜あ〜山の那
 松の園〜あ〜あ〜あ〜あ〜那
 桑山子を〜あ〜あ〜あ〜あ〜那

卒礼 素研
 文夕
 一 牝
 細掛 以芳
 三志
 西三萩 月
 西子川 準蝶
 矢代 花下
 栢尾 烏布

ちあ〜と型も伸るね〜あ
 蜀魂一あ命の戦さ〜あ
 りよ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
 ち〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
 七夕あ〜あ〜あ〜あ〜あ
 系隠あ〜あ〜あ〜あ〜あ
 己六尺立あ〜あ〜あ〜あ
 葉のちあ〜あ〜あ〜あ
 神代〜あ〜あ〜あ〜あ

戸倉 烏奴
 字 夢
 其 夫
 急 耳
 松 陰
 其 可
 和 夕
 東 戸
 而 足

湖一楮を遊あそぶす大ありう如
く善木の櫓よりけりあまうが

紗雀
築白

善光寺の後町よりあまう
集りけりそよむ櫓のせむらひの
くくの善木れうもむしりあそ
りきりけりそよむ櫓のせむらひ
あまういれりそよむ櫓のせむらひ
あまういれりそよむ櫓のせむらひ

あさ歌お皆のさるまじをぬく
あまういれりそよむ櫓のせむらひ
あまういれりそよむ櫓のせむらひ
あまういれりそよむ櫓のせむらひ
あまういれりそよむ櫓のせむらひ
あまういれりそよむ櫓のせむらひ
あまういれりそよむ櫓のせむらひ
あまういれりそよむ櫓のせむらひ
あまういれりそよむ櫓のせむらひ
あまういれりそよむ櫓のせむらひ

柳居士
楚川
随和
雲和
在夫
路合
麦畑
其雲
今郷

仇子海ぬ子十月の所先
何るを思ふく新を正教概
あつと同一を玉造里口
志りいさく物乃盆坊主
幸子かくさく萩のゆき若
そよま〜月も風も山浦はき
一のゑの居の客を根舟して
茶賣も〜子映して新さひ
刺てらま〜子蝶まゝのり子

今伍
斗南
神月
東名
蒼布
一鳥
芦冷
魚池
鼻月

虫ま日ま〜思原乳のいれく
權の清阿〜ま〜ま〜ま〜ま
上京も下京もいりあま〜ま
行時もあま〜ま〜ま〜ま
信心もあま〜旅の一大子
海一鏡をわ〜ま〜ま〜ま
松島く松島〜ま〜暮る〜ま
館の重石のあま〜ま〜ま
何もうも虚のあま〜ま〜ま

昭唇
振る
砂珠
孝井
行芦
斗涼
涼る
桐子
赤名

女房きき佛一衣を駄目
 夕月をきき地りきむのぬくの鳥
 槐花一衣をきく一花
 三
 一侍の破りて一群
 ぬく一衣一衣織ぬもこそ縁を
 びんかく棟を結くぬく
 腰をく繪巻ぬぬむの荷
 花のぬくもこそ佳境中六

徑川 石 吐 吐 吐 千 中 眠 執
 川 石 吐 吐 吐 千 中 眠 執
 川 石 吐 吐 吐 千 中 眠 執

各詠

四季ふか

床のまゆ月燈を思(ゆき)一
 一花海一庵を欺くぬく
 じつ川家子いり葉川家おが
 鶯鶯お家の貴子目もくけん
 ぬく一衣の店つもるぬく那
 衣をきく一衣の店つもるぬく那
 中屋の中を棲き葉山子か
 積ふか世き御せうこのま

松代 楚川 雲和 左丈 洛金 筆已 砂珠 孝井 曉好

月日貝ひらふ湖を汐干ふ那
 山崎の井きこの上を見はせり
 山崎の湖あはれなれば
 薬ももぢる年ぬふ法も那
 常より一節やうらうら
 山内おまの蟹のちり
 一冊の流やあつた
 付つる何の坐標を細代守
 栗く山人トマはる葉うら

千重
 徑川
 振白
 随和
 西條
 石
 一鳥
 朧月
 赤糸
 巨栗

付く月を親くまの
 懐くや机をさるる友
 森かゝ帳はる隠さるる
 奮務の跡とくうら
 名と觸る道まのあは
 連雀の尾もあは柳
 山崎の湖あはれなれば
 ね蓋の巖まのあはみ

松代
 眠和
 其如
 其如
 其如
 八十
 蒼布
 花由
 孤有

室の善佛の袖は寒を佛
替へ木の花を見え六階鈴が
ぬ月おあよまききことしの影
木くくや鐘がまきまきくこの影
子月のお軒の音の枯るまで
兼のまお指のまききやま月お
遠近のま塚まききくく
月影を見えくくくくく
る月をまききまききまきき

女
概 東 今 斗 今 斗 斗
の 水 伍 南 源 源 源
の 源 伍 南 源 源 源
の 源 伍 南 源 源 源
の 源 伍 南 源 源 源
の 源 伍 南 源 源 源

十八

熊の母のくくくくく
り暮のまきおまきまきまき
あまのくくくくくくく
まのくくくくくくく
まのくくくくくくく

帛雲
香川
其雲
其語

木曾鷗

いさくまき十飯のくくく
あまのくくくくくくく
いさくまきくくくくく

あきなるも露の目とさる
杖をよても人のこころあり

魯醇居士

このもろお燭も若草の並の上
岩の柵を凌ぎて乃夢
と多思も川く山阿のさきさる
のさしも来ると何とせしをこ
身の秋も依りて秋のさる
尾をう舞もい日の暮るふく
何まふし是星のさる
秋風

左十
妻二
如毛
玉壺
之帝
三机

家子之ーあめくく禪
きりくく七喜も娘の一葛
運ち草つたて仮名よのかく
あーくさるひの付めさる
日さるあ松よりまじ
画の分りも集りしー全身魂
詠もし水あぬも羨る居角力
麵桶のさる枕も目のさる
しーく綾原のさ堤なり

妻周
ふ政
有常
昭彦
琴宇
志心
女子
茶煙
と中

木 依 田 際 陣 花 の 時
垣 の 又 か 木 と 橋 と 河 原
何 の 始 り 彼 岸 中 の 日 刺 控 了
と 亦 も し も 進 む 百 貫 の
夕 暮 を 何 ら し し せ ぐ 物
を 車 子 藪 原 の つ ぎ り せ へ
河 中 へ 舟 へ せ ぐ り せ へ 平
ゆ ち り せ ぐ せ ぐ 身 の し の 舞
ゆ ち り せ ぐ せ ぐ 流 星

る 石
徳 石
斗 石
春 二
麦 因
玉 壺
丸 十
女 政
琴 宗

山 毛 初 高 の 舞 志 高 へ
桑 上 戸 の 舞 志 高 へ 桑 上 戸
桑 上 戸 を 伝 達 せ ぬ 桑 上 戸
菊 川 へ 舟 へ せ ぐ り せ ぐ
舟 へ 舟 へ せ ぐ り せ ぐ 馬 の 身 へ 舟
河 原 へ 舟 へ せ ぐ り せ ぐ 舟
唐 の 軍 へ 舟 へ せ ぐ り せ ぐ
中 足 毛 志 高 へ 舟 へ せ ぐ り せ ぐ
舟 名 帳 へ 舟 へ せ ぐ り せ ぐ

白 石
女 毛
昭 尾
有 常
外 之
之 帝
孝 心
ろ 夕
三 札

安んずるの本も物くしはる所も
日さしら〜〜〜條の久々
子之を
執毫

各詠 の序お分

源を〜二階〜とまて原か
見多〜物も古〜雪の
障幕や依る〜余の多〜
高が〜の川〜い〜
お〜るや踏る二〜
上田
あま二
子之を
玉壺
石
改

釣竿も春も矣〜と〜みか
斤ぬき谷も音〜お障の
を〜お通〜
〜教や垣の〜
空の〜おさ〜
風〜
き〜
〜
急〜
琴宇
志心
中
倭石
之
石
のり
子
子

如月や銀河の流るる如の裾
 車留や素よりけりけり口も此書
 り多しおとりにさうらふ波の聲
 春命の控へるるも虫の糞
 陽光や付く見えぬ免うり
 風の中 帆をり こそは輝く
 山陰や畑のまの葉をく秋の暮

有常
 茶畑
 之札
 雲帯
 如毛
 麦岡
 左十
 柳魚
 而影

赤うし子とくはくしう柿の葉
 明月おまよりと見とけり
 明月や酒屋をめぐり山陰の
 ちねるや庭へ投出とるる
 多し鳴ふとあうもねるねる月
 糸のたて出さぬあふ柳か
 雫の念よりありりり小袖
 竹屋よりあふふふとるる柳

童牛
 楚諾
 花徑
 る寺
 深忽
 深来
 羽橋
 菊庄

松露庵社中

白戸

女

秋之何れ海一ちり夕煙
葉の中より紅霞や鏡月
ぬ月やぬききききききき
松の葉よりしるし初時
ゆけりお習う遠きうし星
まゝぬきき樹くまき何れ子の秋
あまききききききききき
並ね一日よりうりのしるし
ゆ干物や電の都き波ひまへ

泉之
大来
宇梅
暮原
坐象
山竹
執祀
柳線
柳羽

但盤會お見の曉のなりき
何れよりききききききき
梅ゆくお陽まききききき
月のあふききききききき
常葉きききききききき
水底の見ゆききききき
あまきききききききき
又一夜葉のよめきききき
蓮のよめきききききき

朝阿
泉路
秋光
星戸
千羽
東楚
あま
こ曉
玉時白

飛退て大工見と辰系羽織が
書ておるくくとひまうら
琴向お州の牛入の牛日よ架
飛たふる噴く梅の世
鈴梅おりこまの丸男丸子
蝶もまや実まほ座を障と
采付きの句出ーてひくま
若行のあきりくと冬の日
わう御お驚きまのくと戦きり

吳川
江左
玉魯
岷志
子妻
菊人
岷雪
虫橋
障々

武蔵八王子

際くお竹く大なる回阿う
しき御お解書のをまみを遊ありき
燈の電の灯を雲うし柳か
くくおまおぬる障子紙一室
格うおぬ佐川田をまお
ぢくまみ馬を格出ま格う
紳あまうまうまをこま柳
尼寺のぬれる付まきの
いろくくものりまをまの梅

百斗
元る
る雲
花平
太甲
墨布
如誰
又御
急生

女 眞田

帝

うらむのふきと付まのうらむ
雲の月解つ流り松の雪
待くて運あまなりうり野
まら流おるると定ふ三井の結
ゆりゆり脚の志申は好藤南
葉のしと干細織を松の志
松の葉よりとらふる夢の志
くき叶お退て雲影の志
あをこめとやとけりやとす

栗橋

素人

山室

山螢

金堂

風流

松谷

桶川

河三

森松

千鶴

何いお見えておるは
梅のうら戸桶よとりの志
走ふ帳をよと見えて涼か
雲の葉や木のととてえり
苔の白く見えて柳の志
さゆりゆり柳の志
涼しきお星子楫の志
梅のうらゆりの解しと運
花のうらゆりもさるは

市道

馬朝

仙堂

富島

虎堂

百井

鳥歌

花笛

栗橋

海苔よりおもしろくは波は立寄り
 くらくら石子煙るお響きの声
 牛山と出る日暮り月をえこる
 何ふ能ハ琴丁一はしるまよしの葉が
 涼しきお胃然女庵子おの毛
 経子魁のち月くあたらしくお
 接のききまは子玉葉のう輝
 山賤のちおまよ 雖もはり
 少海くの石の音くはくみか

曾志野
 石
 深子
 眉尺
 笙の
 盲人
 親
 糸線
 塘
 古竜
 一

牛りらう河より盛ん葉柳
 多ふぬぬく櫃戸一お響く如
 ちを解お一ぬく 子魁の如
 和の根きくもまら暮る時わが
 うんこる住ち都く音りあ子
 鶏のくくもまらお雲はく
 卯のまよおいさうと返きまよ
 子親まよの遠目子早まよ
 早まよのまよはまよはまよのまよ

毛川
 素の
 遮莫
 寺崎
 大虚
 上総
 如天
 白林
 女
 主梅
 茶の
 子隣
 本金
 本の

鶴守の窟を出入りく柳か
 夕う赤の朝お小町のうら星
 常幅や見はきし園をいふ
 阿ふと月橋の古さおはる月
 云ふは海うらさ波の音
 きくの鳥おはるめきる走の秋
 橋立をきけしぬをふあが
 費拵を阿ふし庭まのやうか
 とのふと赤のあはるの鹿のあ

百坪 浦川
 椎崎 五亭
 武給 沽市
 家の子 柯吉
 坊田 花お
 橋芝 志跡
 梅止
 総々
 如月

見くくしてむ本を飛し初橋の
 三月くし和を横きぬひよりか
 ねりふし隙を見せり月の心
 りさも又りりさあへん橋乃志毛
 紙一室阿の夜の沙汰お霧さう
 化しと物と料を古棠よりおか
 三月のふら二日さの月の母
 早しめおあふしと唄と時をひ
 赤くく 霊塚暮るる春塘

糸田 止嶺
 富田 祖の
 秋 鳥如
 斤貝 素心
 外星
 吉田 免子
 相控用田 至涼
 春塘 秋

遠来の林業きん後一もも
わづねお見るもよのちよ御宗さ
眠しむれ朝のしらねまらう白
あし一もよ千里よむ子海士う家
山ちくよ木と書と見あゆくや

千代家

枕あしお子と響の家よあの人
帆を文あ海の日あゆむる
あよくく船も行はく船くか

いづれは舟よ遊まきよのま
ふのまもあ細一まれし隙のあ
時をぬきまきくも思ひつらか
梅咲おしんくあの人通るま
あ柳おあくむ人まうあ
鶯ひやあをまきよま立はこ
河あけくまきよ見う帰るま
荒れりのもまきよ浴あ橋が
鎌入くまきよの出来まきよあ

馬東

梅友

戸業

梅心

ある

玉珂

菊路

俱名

二八

川明

布雪

白持

雪珂

梅傑

洞秋

川橋

玉碎

常正

五月の月お空よりしや摩那の鐘
夕音おろき見し海は春はより
燈籠の光とかりりたる御月
錫杖よりしや柳の影
梅よりしやおろきし川より
多しおとぬの光見し柳か
櫻柏の影よりしやおろきし
一燈の光の境よりしや燈籠か
燈籠おろきしおとぬの光

小橋葉 鳥語
戸塚 名水
六柳 鶯父
七ツ木 行雪
戸塚 扇指
飯田 禮名
三橋 市郎

はるけき海と裾おろきの海
稲妻の海より出むと定まり
のろしりつとれぬおと干物
帳はしほりぬをしよの空
川よりおとぬの光をよる
枕の聲障子の光を尋ねぬ
おとぬの光富士の頂よりしや梅の影
流るしよぬの骨折る柳の影
馬の年きぬとより終りの影

八情歌 吹雲
新斗 珠
赤羽 松波
白羽 白羊
大磯 白樂
大磯 白樂
上野 春路

多き物お連も落るく松の中
りまのりま吐よのりま不二の雪
ら〜まらお一羽流ゆく跡継〜
鷹物おみのらるゆきまのりま
漫〜〜果可き海女秋の暮
あ〜〜き人よ定ぬまのりま
夕暮の阿〜戸よ待てぬ鶴か
あ〜〜流子と見えぬ根芥か
〜〜〜あそのま〜おま〜ぬのり

如布
麦
梅志
大治
南瓜
斗
る由
赤煉

おあ後を総のわえぬ物もあか
おのりまき〜言なり〜のり
際〜お常盤木〜米〜遠〜通里
木〜お破の板屋も猫の意
物〜仲〜きえ〜のり〜え〜こ〜る
電馬おあ〜り〜流〜紙〜工〜のり〜ま〜り
兼の〜おめ〜ま〜山〜のり〜ま〜り
ぬ〜〜〜ま〜建〜のり〜ま〜流〜紙〜工〜のり〜ま〜り
り〜ま〜お〜言〜のり〜ま〜流〜紙〜工〜のり〜ま〜り

白井吹屋
民
一馬
夜
月
上白井
酔
馬
ト二

あまもくさく言もくさくうて新のあか
まの河の海新のき秋の毛
初丁おむふおけくゆん徳き
秋のくおあふくもく撓りり
ふくおお相きあ度と靴あり
やより来よりぬ音きく時句か
初ゆお月星の影より廣き
川くおあふくもくあの日をけ
鶯鶯や尻のあぬ石のく

横塚
昇る

小花
三巴

楚原

相戸
持谷

石
勇山

夕多ちお空のあふ秋鐘の聲
り秋のむふくゆもぬ雪の雪
浦くあぬ秋や陣のぬの中
やより来より度ふぬく扇葉ふ
梅く香あふてく白燭の消えり
梅く香あふてく白燭の消えり
春柳おぬらりきり馬の髪
庚秋時ふぬふふく山あく
よきもの生る海やふの月

標名
又徳
山月

里松

雪後
る烟

赤碓
芳山

常陽
白竹
高丁

曉 鏡よりうららかにさくら花のうら
 乙六 宵より世をさしそよる燈籠
 秋の川に雲を渡す山はうら
 ぬ月おしづき錦の帆をゆき
 春の向ふ小のさきの橋を戻しうら
 春の倉 羽草の葉のうららかに
 楓園の酒のうららかに 汲んて
 小原女のうららかに かくるま

甲州初秋 奥州 世蓼 大坂 石嗽 如止 伊勢 倭扇 陰波 吳扇

四時又通

春の梅や 花をいづき けしき
 つき 花をいづき けしき けしき
 夏も 花をいづき けしき けしき
 秋の 花をいづき けしき けしき
 梅の 花をいづき けしき けしき
 大釜の 花をいづき けしき けしき

春の 梅の 大釜の

子孫のほきかく残り焼世が
本意ハ走より一か御生會
々々鳴や仁王の標くらが免
くのもやいろこの花も咲き
くうにおよみよ家のあそび
いもの葉の露見ると運る暑
かむるや虫を隔たひの松
櫻はふれとせりうまかき
かすの子をけえ出しくま苗か

昭居
居
百
字石
紫居
芋居

頬をくま苔の色教ふ法あか
早しめわとをきりおし不
ちのへお松あしりそを備
るの子の酔るうたも神さ
いよけく結城を川や秋の
一るの跡もあそびよの秋
晴れやおもひもうたを
何さうや榊あの時も
とんやこれ出たり浦の岩屋か

昭居
居
百
紫居
芋居

四五尺の飛這の浦や秋のらま
 けり跡やとあり深窓の梅の色
 陸吟や吹ぬきと並くあきりき
 積雪おゆるりあゝのく車
 一日と澄石すくると冬あまり
 うゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 戸之才ぬてちうのりぬか
 冬川や草屋まきし暮らるる

香光
 昭彦
 香光
 昭彦
 石
 草
 昭彦

當時名録 四季不分

本よりきて機帯と梅の那
 澄る一虫おとすり田螺か
 春くくくくくくくくくく
 くくくくくくくくくくくく
 くくくくくくくくくくくく
 くくくくくくくくくくくく
 梅うきや終ぬ流も花の影

白戸
 止絃
 尺五
 如之
 見念
 王菱
 後川
 半化

祇園會はあきの山をこころ
ぬ月おふ破の舞屋もくのもう
畑中の葉まけられ何ハ執力が
博帯く流ましく守おるの言
月涼一羽の葉もみ只をん
ういもあおくもくし海のと
稲妻きき育ののらるおの川
まけり見しりまきれき見か
草花りり星雲遠一梅のま

如本
倚之
既白
夏水
素園
伊勢 伽涼
入楚
二日坊
藤原

きー帯おまき夜のぬる結り
梨の花咲き會さくうり
びくー雲の出ての庭暮れ
もまゆもものお何走の鏡磨
もあくるま枝のまの影おまの白
伏山まなふおけいぬあく
やまぬきの敷もものけい小ま
世の中まぬのまらる涼一
まらのおつゆ楚備の風あ

京 藤多
中 康工
法 市
世有
中 八巻
玉芥
中 茂
農 玉塚坊
戸 葵多太

柳花子坂東あつのつけくろ
もつ又母まはるれ根芥けし

録くま

屋おはるのめういふうらう
名月おぼくく白子編奇の
七柳やまきうみゆり中ふし
ねも釣ふ録のしぬハ味う那
まをとお自所子なりゆゆのふ
代士の願む——々録の霜

武彦
柳
吟
山

強河
し
思

京
又
下

諸
九

至
芳

三十六

ぬーのまき代出てあふを解か
録くのゆきをわらう川ね急
くはあまよ一日まむき解く如

はくま

楊古おもい秋の花端く見ん
むい夜よして待せりゆゆが
袖もあもそのくくおま川あ
うくらの録くまお秋の念
の秋お蒸き枝まなり深也

江戸

花
六

又
尺

善
成

尾張

白
尾

秋後

大
川

大坂

寸
馬

伊勢

巴
童

新くくまひ青きれりやわが
梅咲おゆき日のふも道とせり
籠の聲やせむをさくしり
きし筆お木瓜の中しゆぬのき
姨族の月お曇れきくしゆ
くしきりお中しゆぬを重ひし
のまの月雲おまみして従軍し
後橋子ちもくしり大根川
ふちりあまひぬまひぬふ城か

信濃

柳洲

十丈

橋在

鷲心

秋名

耕月

塚塚

麦秀

茶屋

及の鐘の出とせぬもふたれぬ月
石垣よ一とと聲をまよらり
ま〜〜日の川伸と柳飛
ま〜お積り〜ま〜川の底
河〜〜鐘の音〜〜鐘の秋
し〜〜家の窓〜〜見〜〜田外
禅寺お音〜〜お〜〜青〜〜里
松原電中

白戸

抵る

あ々

義批

珠玉

大橋

山あ子

奥州
吉電

紙中

省茶

伽藍の音の仲も我ふやうもみ
長い日暮空も遠く舞ひたり
陽を何れそくの影お先

本曾よそ

倉はりそいのもおは曾の地
お毛一紙おともく向ともまの月
夕暮湯まの躰隠しりり
空折や一夜あつことつる
梅うさおはしめそ越へびふ合

越来

蕉白

能を

梨一

加賀

見推

京

費古

江戸

再探

平甚

又何

は〜の古ききね〜き口のら
汲たる人車ま白〜を解川
紫陽もぬ色定まはら〜り
み〜夜お育つ〜き〜鶴の夢
梅〜色おねを己制〜癖の〜
赤〜色お待お〜色〜おは月
伐杭と守れお〜お梅の〜分
い〜物お禹王の廟の〜り〜り
お〜色〜色益見せ〜解〜里

急々

乙何

左更

蓮朝

兼珠

乙溪

鳥系

牛溪

蹄月

中くおき文より跡多き
一川を流し室より写子那
よの月柳をむらさきりり
明月お牛の脊よりかく駕咄と

京子倉
一瘤
白戸
卷阿
太き

ル下巻舒

けしき京下は状ひ
重なり空お庭見しや暮る人
秋分や蓮をちりて花せしめ
总もよお白きこの庭をばき何そ
何し猶のけ出さるや冬の月
小夜時の白隣へそりぬ傘のたし

明春
信徳
素堂
玄来
丈艸
菴榮

日の春をいささか驚の何ゆか
冷急の暮千日なりあはれ毛く
盆乃月集こころをみきり
禅門の草足袋たうん十夜あ
山くや一かぬし秋の雲
まをわはくくあはれいふ本
けしあはれ小粒なりぬ玉月あ
炭電よ白負の猪の倒まきり
物の面よ舞うをて何いさく

其角
冬雪
井坡
津六
原菟
支考
尚公
允兆
荷舎

四十

電馬の影つれはくぬるあはれ
春の口や柔の本畑よ小諸ま甲
り〜あ祝よ白髪と隠しり
高燈籠盆をきこめふもけむは
本履ぬく傍よ生りり夢のま
まあはれや田舎の雲の終り里
海山のなす岸かきさ吹飛
ゆおまはれあはれくてもなきあはれが
く〜あはれの一あはれと入りり

北極
三秀
越人
千那
本節
史邦
乙井
野名
利牛

錦蓋のけつ〜さあ〜の暮
かみり〜ぬき〜の歯の秋の合
州石〜うぬ〜の舟よ急ぎ
吹雪〜かまの飛ぶ夏跡
躍る〜ま〜の碇を魚の舟
行舟と藤城のワキに揚る
ホ〜お片田の時の鉄字
帰郷の小ふんを〜の月
鳴く〜を焼く〜の巻

孤屋
杉冷
仕口
一尖
孝由
本因
惟然
酒堂
拳白

あ〜〜さや中夜と〜住旅〜

〜夜麿のぬきと〜

萱草小錦洗ひ〜あま
走僧も依然〜あま
ぢ〜まみ子齊ぬ〜ん鈍ぬき
七夕お戸障子ぬ〜夜ま
塵濱子ぬぬ〜浦ちり
くあ〜れ中〜柳の那
遠山お晴吟は〜のほろ

曾良
ぬぬ
之さ
舎羅
荊口
句空
浪化
秋之坊

鼻あつち鶴も何も花束のまじ
すもめての髪子とるや夏の虫
食けふお本曾のふひの袴との
安心の指もふしお秋のらま
鼠壁いしく眠しぬきの暮
舟子のふしうけぬ佛の口の葉か
虫干の幕を飾りあうを分
鹿の喜よくの乱見ふらうか
莫弱の名とぬ回んや戸橋

万子
昌房
岱
柘
普
高川
一
髮
孝星

くの花お星のくを遠く何か柳を
虫の影物のやるせなきあか
障子紗 月のさひくも柳か
さ蕉もい何かあしお秋の冷
笠とまハ六十教のしん
舟のさや焼て待夜のやま
くく飛すまもりし体も流し
葉ひけし詩書あん涼ゆ
ふふ来ふ早稲の中う躍う那

露沾
探丸
素竜
路通
園女
芳樹
智月
秋
言

秋冷のめきつりき子人の歌
おりし出てとりの菊うき柳か
うう井よ山伏見えは早ら後
榎桐の葉の露よきよ何れか
るの暮かさのくもりよ啼枝か
涼しき竹握るの藪はく
戸障子と明きけりぬんふ
女良花梅よ糸をねらもしり
色くしの古根よ高き庭の南

鬼貫
七磨
為吟
神童
二名
才強
名札
松吾
後似

明月ハ夜も流る小ぬき那
枯のりぬ葉ハこのお鶴は花
美栗の谷にやうけ蟹の甲
やままぬの走里くせふ白河系
小賤の桑山子ばら山を笑ひり
し押よと反田曇れ時雨か
あな海お羽白黒鴨赤し強
何ぞ鷹の臂子返はく夜寒か
とよ柿とやう物とて通る十おが

吼雲
万平
祐甫
名園
室正
聖心
忠念
畦止
裾迄

くろくく海月子文ねがまこは
家のおさきえんの賣のふあしう
純くく干舞賣とともあうり
石印の割きとねくお石落の花
く神おまき舞く秋の苗
之日の並とえぬまき猫の玉黒
是り星の横町出うふむ吹く如
霜はく舞おのうあきくお去電
搔あふ馬糞もえふあましが

車庸 杜國 馬寛 胡及 月睦 竹戸 明夕 圃心 水芥

軽くく比敵のあうりも拾か
川くのみのをえぬあまか
根をねくくえまね舞く記
燦をまねてあ思子ああみあ紙
陽炎あうりの眼のとえくく
大名の通里とさうり秋の松
さくさう拾ひああああ子か

由井、廣よて

舎朶 冬文 沽圃 黄逸 傘下 和及 牝隣 岩箱

心月の海をけく檀く付

出うらりお棹もゆりしを葎の丈
物ぞのとなくはきくは木の芽が
きこむ一寸燭臺清く写りう
紫陽花のトリもあおれを川
う川橋ふの子琵琶の隣に
稲はくお規売焼く世のふ
秋の日お女はくひのほきく
まの目おまの葛の裾はけく
秋の川おひさう清くぬる秋葉

巻五
徒吾
素秋
川
一嘯
階高
琴吟
寺山
岨邑

菊の香のとのよけく是れ秋の
灯を光を写し入るの子親
う秋の夢はくもてしざりう
の秋お節の先はくさりくす

菊園
堂之
若木
杜若

石動よき

きく節をくもりのいぬ山路に
とくは夜はぬまう初秋
一羽飛ぶ二羽とひのちハ秋が
志らぬおこよふく秋田の松

司炉
麻父
巴舞
雲裡

神の妻多賀の栢子のあけけり
きゆもあをさきぬのうらな
けきをも葉うねくおをさす
秋の月の中よぬれこのあき
夜くを煙よりけり鉢のあき
狩人よぬれあきうらあき
ねハあきうらあきうらあき
ねハあきうらあきうらあき
あきのあきあきうらあき

兔士
古山
秋
左次
反朱
封ト
其行
大阜
高流

甲六

あきうらあきうらあき
待ちまお望のいのちハあきの
富士見まハあきのあきあき
おのあき石まあきあきあき
畑中まあきうらあきの柳か
何程のあきあきあきあき
あきのあきあきのあきあき
あきのあきあきあきあき
あきのあきあきあきあき

新成
雁人
梅路
温故
左菊
曾北
倚彦
曾平
本思

世き思お同一しけしと磯の波
まきののうきとて帰ふのわきか
の果を燗とてゆかるとりか
明日おと文基一酒のり
鐘掃を下りて遠き初時
念佛もぬも何とて一虫の鳴り
ぬきうり深きつりおと川
まきののうきとて帰ふのわきか
まきののうきとて帰ふのわきか

馬志 宗瑞 竹茂 南川 古由 牝也 言ぬ 沽縁 玉賈

妹一きの底をぬかして流るる
陽をよきとて羽をとくまき
うきおのぬきとて帰ふのわきか
まきののうきとて帰ふのわきか
代りけしとて帰ふのわきか
まきののうきとて帰ふのわきか
あきとて帰ふのわきか
あきのぬきとて帰ふのわきか
あきのぬきとて帰ふのわきか

文素 可念 海唇 矢鴉 古岸 千杏 君山 東梢 吉壽

何れもさへいら拂りぬる合好
 戸子傳はし一鳴子、あつてぬ鶴が
 赤櫻のぬの指もも軍古鳥
 夕暮の穂垣より柳が
 船むきの一株めらるる
 声くはを曉色——描の意

東睦
 空悲
 岳徒
 暮金
 星飯
 左ぬ

四季のまよ

山あしきふ草花色——梅の軒
 叶の葉ををぬれりぬるふか
 ひもぬく——杉葉もぬるを
 緑もきやさき——春のまよ
 とく響く涅槃の暮の鐘の音
 紫陽花もぬるまよさ日夕日か
 根柿のちぬれはさよ秋のまよ
 岩ぬの隣もぬるまよ

芭蕉

夏夜

一待り居るのふらぬ様うき
 牛やその之後去りしゆやめ賣
 路一折立て見せりりきり秋
 玉眼の連磨忌書 松の念
 ゆくの帯ひをながくおあが
 うんこる舟をむくの岸に居
 との言の楫子揺るおあが
 折ひくりにとせりりきりの電

柳居

鳥醉

追加

心 白 おのれはきりゆひのちり
 走僧の程府よりふひうき
 康のちやあそふあきうり星
 牛の貝ぬくく見を尾舟
 何の川底り舟を伏見
 秋のきりし尖りてのち
 何のちやお様ふりふい
 ゆひ立て見せりりきりの電

我後 信日
 信中松代 眠
 須波 不活
 素人
 岩村田 周布
 岷山
 信夕
 鈴如

おののぬよ強うぬ来のこく系
と見えぬいふがゆを中のみ
うらわおまのりり子係は一程

松本商店中

おの系の川も沸て涼の系
草くく系屋もふあめめ
くくぬすのま系立の飲船
涼一すわ目先と見えハ橋の系
梅あくわあーこびのま

小諸

松本

系部良

下総子

杜

白戸

其笛

甲州初給

双程

下総子

る維

白戸

末堂

存題

千載を去るこも勢子権を墳墓の
あつたこハ圃田のまあに柳半家
姨捨の子雀お吟行の言を不子
共に壽のこもと其山ハ姨捨り
いりよあまの之風程の寂を
あつたあつてあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

風流や志の物と退き自造を心しつゝ来る
石に客心を去て障なきまはりの山あり
信中の詞友の物を心しつゝ碑と
栽之して故を温るゝ此の志に及ぶ諸邦の
縁友羨むしつゝ志に及ぶ諸邦の
天下に名を立勝おの産なるはつゝ
う月神の歎を多と少の志と云ふも
味鳥居の風雅の冥物にありつゝ
松露庵主人飲茶をて亭らむむ
なまのつゝ柳拂花のやむむ

狂客を徳の夜畦の旁も置き踞きて
酒神の夕く子間をなましつゝ
喩を引子扶桑に比するも
掛く千曲川の蒼君く雪はかく
隈なく秋の風を何とせめて
河ありともつゝありきなりつゝ
少先この浦をいつそあるま
法師の中なきまこと
曾中一の端りを澄く
噴接の杖を申すも



かくるる一當りて初友のききに叙れ是るは
 ととて噫寔此四討子何ふらう一ととて人の
 刑子あゝゝゝもあひ日ハるゝ赫赫と
 一と皓然と生怪むらゝゝと何や
 乃々々好白明云々々々々を採て弊虐此
 意下す一と書



圭肆

海字亦也あ辻村五名所
 本限十二丁目近江屋主所

彫工

木茂 木堂

尾

